

竹千代賞

彼岸花の追憶

一
条
零

初夏。

むしむしとした暑さのその季節に必ず囁かれる噂。

“彼岸花の神社”

『彼岸花の咲き誇るその神社は』

『何か対価と引き換えに』

『願いを叶えてくれるのだから』

『でもその神社を呼び出せた人は』

『誰もいないのだそうだ』

『ねえ君なら』

『何を願う？』

馬鹿らしい。そう思っていた。



でも、今年に入って、その神社の外見についての噂を聞いた。

『赤い鳥居に紅い目をした鴉が止まっているのだって』

『山の上にあって、女の子がいるそうだ』

初めて聞いた時心臓がドグッと嫌な音を立てて飛びはねた。

何時かも分からない昔の記憶を夢に見ることがあるのだ。

その夢によく出てくる神社がその様な神社なのだ。

女の子。誰か隣にいたのだ。幼い手。揺れる黒髪。ピンクのサンダルに青いスニーカー。

大体その夢はそこで終わる。

女の子が誰なのか、そこは何処なのか、何故そこにいたのか、どうやってそこに行ったのか。何も分からないのだ。

だからこそ夢の類だと断じてきた。

でもそれがなんだと言うのか。夢だと断じてしまえば良い。

そう思った。だからこそそう思い込もうとした。

今年に入って新しい情報はもう一つ増えた。

“女の子と男の子。幼い二人が八年程前に神社を呼び出すのに成功していた様だ。その為に神社は今現世に現れているらしい”

ねえ、君なら、何を願う？

僕は………。

八月中旬。

学校が始まった。

僕の住む地域はとも田舎で、農家のじっちゃん、ばっちゃんがほとんどだ。そのために、僕の高校では夏休みに六月終わりから入る。

農業を手伝うためだ。

逆に、田んぼで稲を刈るのを九月に手伝う者はその間に学校に来て、八月半ばから夏休みが与えられる。

親や親戚が六月頭にプリントで申請するシステムで、僕は家が農家でないために今日から学校だった。

「奏汰^{かなた}」

後ろから声が聞こえて来て振り返ると、幼馴染の千歳が立っていた。

「千歳。久しぶり。宿題終わった？」

「やー、聞かないで。あとレポート一枚なんだよー」

笑って見せて、千歳は僕を見た。

「奏汰。そういえば、こないだ電話で何か聞こうとしてたじゃん？ どしたの？」

ドキッと心臓がはねた。今年に入って、よく見る夢があった。そこに女の子が出てくるので千歳だと思って聞こうとして電話をした事を思い出したのだ。

でもその時は、そんなこと言われても千歳が困るし、何よりこれが俗にいうキモイ、なのではと聞けずに終わった。

ドクンと飛びはねた心臓は胸という狭苦しい場所に押し込められて飛び出そうと暴れているようだった。

「僕の知り合いから彼岸花の神社の噂を聞いたんだ。その日から夢を見るようになって……千歳かも知れない女の子が夢にいたから……こんなこと聞くの变かも知れないんだけどさ。僕と千歳って彼岸花の神社行った事があるのかな」



俯いて言った後に千歳を見ると千歳は表情の抜けた顔で僕を見ていた。思わず背筋がゾクッと総毛だった。

何も言えずに千歳を見ていると千歳はすぐに何時もの笑みを浮かべた。

「なに言ってるの？ 行ったことあったら対価が消えたはずだし。私はそんな事覚えてないよ？」

千歳その言葉に僕はそれもそうだと思いついた。

そうだねと千歳に告げると千歳は笑った。

「奏汰は繊細だね。噂に影響されて夢見るなんて」

くすくすと笑った千歳にむすつとして返す。

「でも本当にリアルな夢なんだ。風の感触とか全部感じるんだよ」

千歳は笑って「繊細なんだから」と僕に言い返した。

「対価……ね」

ポツリと呟くと千歳には聞こえなかったようでキョトンと僕を見返していた。

「なんでもないよ」

呟くと千歳はそっか、と笑った。何時もニコニコと笑っているこの幼馴染。

先ほどの冷たい表情は何だったのか。きっと見間違いだ。

チャイムが鳴った。

「わあ、奏汰！ 急ごう？」

千歳は何も急いでないかのような声でパタパタと廊下を走って行く。

後を追って早歩きをする中でふと、窓の外を見た。

「っ……！！！？ あ、紅い、眼？！？」

紅い、瞳。紅い瞳の鴉が、僕を見ている。ドクドクと心の臓が早鐘を打って酸素と混乱を身体中に巡らせる。

呼吸が何故か浅く速くなって。

夢によく見るあの鴉だ。鴉は真っ赤な瞳で僕を見ると一声鳴いて飛び去って行った。

やっぱり、夢なんかじゃないんだ。

ドクドクと耳元で鳴る心音がまるで心臓が耳から飛び出た様で。

僕は一心に鴉の飛び去った森の方向を眺め続けた。ぐるぐると頭の中でこんがらがるように巡り続ける鴉の紅い瞳。

「奏汰？」

先程先に行った千歳が来ない僕を心配したのかパタパタと軽い足音を立てて走り寄って来た。

「千歳……」

ホッと一安心したのか力が抜けて脱力する。

「千歳は見たか？ 鴉、」

掠れる声で言うと千歳はキョトンとした顔で僕を見た。

（見てないのか……！）

先程引いていった汗が焦りと一緒に戻って来る。ドクドク五月蠅い心臓に呟く。

「——る、いっ……」

煩い五月蠅いうるさいウルサイ！

ドクドク脈打つ音が頭を支配して、心臓が無くなれば良いだなんて思ってしまう。

「奏汰？」

千歳が不安げに自分を見ている。

「ち、とせ、？」

奏汰の何時もスツと細められている瞳がグラグラと頼りなく揺れている。薄らと涙が膜を貼ってキラキラと



光を反射し、そこに自身が映り込んでいるのを見て千歳は心を飲み込んだ。

「……思い、出してるの？ 奏汰」

その言葉に奏汰の眼が見開かれた。

「何を、そ、うだ、千歳、僕を見、てる？ 高い、そこは何処？ ……遊んでた、よね？ 千歳、」

頼りなく揺れる瞳は段々と涙を孕み、謔言のように千歳に訴えていた奏汰は「うう、」と呻くと倒れてしまった。

「奏汰!!」

悲鳴にも近い声で名を呼ぶと、出席が遅いのを気にしてか教室から出てきた先生が目を丸くした。

「中野！ おい、片桐はどうした?!」

緻密に、尚且つ即座にこの場を切り抜く言い訳を考えた。今のままで説明すると変だろう。

「片桐君、さっきの集会で貧血気味だったみたいで……。頭が痛いって言っていたので保健室に連れて行くとしたら、倒れてしまって。片桐君どうですか、先生」

先生は奏汰の状態を見て頷いた。

「貧血だな。中野は戻っていなさい」

ざわざわとした喧噪の中、千歳は運ばれて行く奏汰を見ていた。

「っ……。うっ——？」

夢を、見ていた。いや、これは現実？

夢の雫と忘れ時の泡に溺れる。

『奏汰っ!!』

怒号が自分の名を呼ぶ。

低くなった目線で見渡すと小汚い部屋にだらしなく伸びた服を着ている女がいた。

汚い長髪を振り乱してヒステリックに喚き散らしているその女は自分をひたすらに呼んでいた。低い自分の目線はゆっくりと自分の手を捉えた。柔らかそうな手は同じく幼い手を握っていた。

『奏汰っっ!! こっちに來なさいっ!! 聞こえないの?!』

心の中では焦りと恐怖、少しの諦めと一抹の、『あぁ、またか』という冷めた気持ち。

『かっ君……』

隣から恐々と声がかけられた。幼い女の子の声。横を、向いた。

「っっ——!!」

ヒュウツと喉が嫌な音を立てて息を吸い込んだ。一度に入って來た空気に溺れそうになり、ゲホゲホと咳き込んだ。

「片桐君、目、覚めた?」

コホッと咳をこらえて保健室の養護教諭を見つめた。

「あの、僕は?」

「貧血で倒れたのよ。今は二時半よ。」

言いながら先生はスポーツドリンクのペットボトルを差し出してくれた。

有難く受け取って、急激に冷えて乾いた喉に流し込む。

ゴクゴクと飲む音がしんと静まった保健室に響く。先生は「後でクラスの子が迎えに來てくれるから」と言い残して保健室を出ていった。

口元を拭って見渡す。夢に出てきたのもしか、神社の夢と同じように過去の記憶ではないのか、と言う疑念が鎌首を擡もたげてこちらを見た様な気がする。



パタパタと上履きの軽い音が廊下を走って来て保健室の前で止まった。ガラッと扉が開いて千歳が入って来た。

バチッと視線が交わった。蝉の声が聞こえて来て空気に霧散していく。

「奏汰。もう起きて平気？ いきなり倒れるから心配したよ〜！」

駆け寄って来た千歳に僕は微笑んだ。千歳は僕のリュックと自分のリュックを持って来てくれた。

「大丈夫？ 帰れる？」

顔を覗き込んで言うものだから僕は苦笑して言った。

「過保護だね……僕は大丈夫だよ」

千歳は恥ずかしそうに微笑んだ。

帰り道。蝉の鳴く田畑の畦道。キラキラと輝く小さな川。舗装されていない土の道。

小さな川の小さな橋を渡った時に千歳が思い出したように声をあげた。

「ここってさ、小さい頃よく遊んでいた川じゃない？」

小さい小学生達が魚を追いかけて遊んでいる。僕は思い出そうとした。

ぼんやりとした過去の記憶。当然の様に千歳もぼんやりとした記憶でいるのだと思っていたが、流石は千歳。ハッキリ覚えているようだ。

頑張っと思って出そうとするが、ぼんやりとした霧が晴れない。モヤモヤする。

「思い出せないなあ……。でも、もっと別の場所で遊んでいた気がしたな……」

何処だったか。記憶の糸を手繰って行くと頭がズキッと痛んだ。

「奏汰？」

千歳が自分の名前を呼ぶ。ハッと千歳を見ると千歳は心配そうに僕の顔を覗き込んで様子を伺っていた。

「……何でも無いよ」

また、夢を見た。

忘れ時の泡と哀しみの波に溺れる。

『お前のせいだ！ お前のせいで私は不幸なんだ！』

ヒステリックに叫び泣く女。

『分かっているの?! お前のせいなんだからね、お前が悪い！ 聞いているのか!!』

ビクビクとしながらも自分は幼い声で喋った。心が凌辱されているのが易々と感じられる。

『僕、いい子にしてるよ……? 僕、悪い子なの? ちいちゃんも僕はいい子って言うし、スーパのお姉ちゃんもいい子って言うてくれたよ……? 違うの、?』

一言発する度に空気が重くなっていく。声を出そうとする度に喉が張りついたようになって、喉が渴いて、声は尻すぼみになっていく。

女は無言で腕を振り上げた。

『や、嫌だ、止めて、お母さんっっ!』

「っっ!! っ、はぁっ」

ガバッと起き上って荒い呼吸を整える。空調の効いた部屋なのに脂汗がベタベタと服を貼りつかせて気持ち悪い。

貼りついた前髪を除けながら時計を見る。

午前五時四十五分。

寝るには時間が足りないし起きるには早い。けれど夏の朝は早く、もう外はさんさんと輝いていた。カーテンを開けて青空と輝く緑を見る。



シャワーの蛇口を捻って熱いお湯を出す。

汗をかいて冷え切っていた身体が熱いお湯に触れてキュウツと収縮した。汗が身体の表面を滑って流れて行く感覚に眼を閉じ、頭の中を整理する。

あの人を、母と呼んでいた。

じゃあ今僕が両親と呼んでいる、この家の持ち主達は誰なんだ？

ま さ か 、

彼岸花の神社

あれは 対価を

消す？ 喰う？

もしかして僕は

両親と 引き換えに

願いを叶えてしまった？

だって あんな人 なら

消すのも 躊躇しない かも？

もし そうだったら

僕は 人殺し？

ガタガタと浴室の向こうから音が聞こえてきて母が起きた事を知った。
母ではない母。父ではない父。

貴方達は誰だ？

「お早う。今日は早いね、奏汰」

バスタオルで髪を拭きながら風呂場から出ると母、好美が微笑んだ。

忙しなく動く手は朝食の準備をしていた。温かい味噌汁にツヤツヤの白米。目玉焼きにウィンナーが添えられた、僕の家の朝食。

手伝っていると直ぐに父、浩三も起きてきた。家族三人が食卓について、テレビがニュースを流して、学校や次の休日の事について話す、家族の時間。

それがどうしようもなく今は怖い。

朝食が終わって、後片付けをしている時だった。好美が声をかけてきた。

「奏汰。どうしたの？ 今日元気が無いみたいけど」

皿洗いをし、泡に濡れているスポンジを握る手に力が籠り、グシヨット嫌な音が出た。



「母さん、あのさ、変な事聞くね、今から」

好美はコロコロと笑った。

「いいわよ。何かしら」

きつと大丈夫だ、と誰に向けた言い訳か、心で呟いた。だって、物心ついた時からこの人達は僕の両親なんだから。

「母さんって、母さん達って本当に僕の両親なの？」

言ってしまった。僕は視線を手元のお皿に集中させた。

ゴシゴシ、ゴシゴシ……。

キュツ。キュツ。

ガシヤ。

ピシヤ。ポタポタ。

ゴシゴシ、ゴシゴシ……。

声を出す者も身じろぐ者もない。

フツと視線を好美に合わせると好美は表情の抜けた、怯えとも焦りとも懼れとも取れる顔をして奏汰を見ていた。

脊髓に液体窒素を流し込まれた様な、見てはいけない世界の裏側を見た様な、触れてはいけない世の理に触れた様な、怖気と鳥肌、寒気と背筋を伝う汗の感覚。

ゾクツと背筋が伸びた。

ポツリと白紙にインクの染みが垂れた様な感覚が奏汰を襲う。白紙と言う今までの生活にインクと言う違和感。

「何言ってるの。私達は家族よ。それともなァに？ 他に家族がいるって言うの？」

好美の何時もよりも数段低い声が奏汰にじわじわと忍び寄って来る。作った様な薄い笑みがベッタリと好美の顔に貼り付いて仮面越しに見られているかの様な錯覚に襲われる。

「他にいたの？ 何処にいたって言うの」
ジワッとインクの染みが伸びた。

「ゆ、夢に、違う人を家族って言うてる夢を見て……」

カラカラに乾いた喉で声を絞り出すと好美は途端に笑顔になった。

「奏汰は感受性豊かね。夢よ？ 本気にする事ないわ。私達家族を疑う程真に受けるなんて……笑っちゃうわ」
コロコロ笑う好美が恐ろしかった。

先程まであんなに恐ろしい顔をしていたのに急にこんなに笑うなんて。やはり後ろめたい事がある。それは家族に関する事で、言及されたくない様な事。

「行ってらっしゃい」

好美の行ってらっしゃいに見送られて家を出た。頭の中はグルグル巡って廻ってめぐる。ぐっちゃぐちゃの脳内は何も分からない僕を嘲笑っている様だった。

その日から。

気づくと紅い眼の鴉がいる様になった。

ふと窓の外を見た時。帰り道。通学路。

また、いる。

そこに、いる。

また見てる。

あ、飛んだ。



……そこにもいたのか。

見慣れる程そこにいるのに、何故か見慣れられない。見る度心臓がバクバクと飛びはねて飛び出そうになる。そして必ず夢に見るのだ。

母と呼ぶ小汚いあの女と、時たまに父と呼ばれる見た目だけは優男の男。

夢の僕は何時もそいつらに凌辱されている。怒鳴られ、叱られ、叩かれ、俗に言う、コレが「虐待」なんだなあ。と身を焼く感情の中で思った。

驚いたのは、恐怖と畏れの中にちゃんと愛情があった事だ。

何時も夢では冷たく当たられるが幼い僕の記憶には優しい両親の姿があって、偶たまに思い出した様に優しくする両親に、しっかりした愛情があったのだ。

借り物と思わしき今の家族。

この家族にも愛情はある。

あるんだ。

それでも、夢に見る時の、叫び出したくて、苦しくて狂おしくって、熱くて泣きたくて、今にも好きだよ、僕を見てよ、優しくしてよ、愛してよって叫び出したくなる様な、胸の焦げる、胸を押さえても痛い甘苦い狂おしい感情とは違うんだ。

それと同時に痛い、苦しい、怖い、憎い、なんで僕が、と言う狂おしい程の感情がドッと溢れそうになって。涙が溢れて、息が詰まって、胃がひっくり返る様な、吐き出しそうになって目が覚める事は誰にも言えなかった。

夢に見れば見る程夢の中の出来事だと断じる事が出来なくなかった。

コレが夢ならば、僕のこの感情の説明はどうするんだよ……。

学校が始まって一週間。

つまり僕か、僕の周囲が狂ってから一週間が経った。

益々僕は周囲が信じられなくなっていく。家族も、友達も、全部全部作り物に見える。

千歳、そう、千歳独りを除いて全部作り物に見えた。千歳だけは絶対に僕を信じてくれだろうと、千歳だけはと偏執的に思っていた。

意を決して僕は数少ない“友達”だと“思っていた”クラスメイトに話しかける事にした、昼休み。

「なあ、真中。紀野」

真中譲。賢い風の眼鏡の男子。頭は悪い。

紀野晃也。クラスの中でも頭が良い。

「どーした？」

「悩み事か？」

屈託の無い笑みを向けて二人が僕を見る。

僅かに胸が痛んだ。

仕方ないとは言え、こいつらを友人と思えなくなったのは、友人と思わない選択をしたのは僕自身だからだ。

僕の弱さだ。僕の防衛本能だ。ごめん。

「なあ、もしも家族を本当の家族じゃないと感じて、昔からその人と家族だったと証明するには……って時に

お前らどうする？」

紀野と譲は顔を見合わせた。

「今、かつ君は好美おばさんを家族だと思えないの？」

譲は伸び伸びと間延びした口調で僕に言った。びっくりして固まった僕に紀野が言った。

「何びっくりしているんだ？ 順当じゃないか？ だって、お前が証明したいためだろ？」



僕は否定した。危ない、悟られるとこだった。二人は顔を見合わせた。

「ねぇ、かつ君さ、もしかして」

譲が何か言おうとしてそれを紀野が塞いで止めた。びっくりしている譲に紀野はヒソヒソと何か言った。

「そうだけど……」

「——？」

「！ うん、確かに」

「——？」

「分かった！」

こいつらの間ではよくある事だ。

何時かに聞いた話だと、「能無しデリカシー無しの譲に発言する事の危うさを教えている」らしい。

「なあ、奏汰」

紀野が喋る事にした様だ。僕は紀野に向き合って続きを促した。

「例えば、お前の友達がその状況だったとしても、お前だったら確かめてどうするつもりなんだ？」

紀野の問いも最もだ。僕は努めて自然に答えた。

「何もしない。強いて言うならば理由を聞く事にする……と。」

紀野は良し、と頷いて喋り出した。

「何故そんな事を確認するか。一目瞭然だ。」

やはり隠している事があって、心当たりがあって、だから自分が何かしないか心配だったのだろう。

「例えば——、奏汰。お前の家、アルバム作っているか？」

頷くと紀野は頷いた。

「じゃあ、そのアルバムの昔の頃、そう、お前の言っている辺りを探してみると良い。無かったら恰好の証拠

だ」

紀野の言っている事がわかって僕はハッとした。無かったら、つまり……。

「ね〜ね〜。無かったら何なの〜？」

譲がごねた。紀野は譲を見て嘲笑して言った。

「無かったら、その頃は一緒に暮らしてなかったと言う事だ。何冊もあるアルバムを一気に見る事はないと高をくくっているだろうからな……」

感心して紀野を褒める譲は僕に向かって微笑んだ。

「どう？ 答え、見つかった？」

「俺の案だけだな」

紀野と譲が笑いあった。僕は軽く礼を言うと呼び止める二人を無視して自分の席に戻った、その背中を追う様にして予鈴のチャイムが鳴った。

決めた。ハッキリさせてやる。

今日は金曜。明日。明日だ。

もうこの悪夢から覚められるはずだ。

ぐるぐると、廻る。

夢を、見た。

初めて夢を見た時と同じ夢。

『かっ君……』



幼い女の子の声。繋ぐ手。横を見る。

『ちいちゃん……』

「つつ——~~~~~!!」

バツと飛び起きると、そこは自分の部屋だった。当たり前だ。昨日ここで眠ったんだから。今見たのは、夢だ。

なら、なら何故、千歳がそこにいたんだ？

幼い千歳。幼く小さく無力な千歳。

千歳がそこにいたと言う事は、この家族が借り物だと言う事を千歳も知っている事になる。

ここに遊びに来た事もあった千歳。

好美と仲の良い千歳。

浩三とも世間話をする千歳。

いや、一家ぐるみで仲の良い千歳の家。

世界は何時から狂っていた？

元から？ 今から？ 何時から？

それとも狂っているのは僕？

「げほっ……げほっげほっ！」

現実には溺れそうになる。

時計は午後の二時を指していた。

ああ、そうだ。

昼寝していたんだ。

なあ、今だと思わないか？

歪みを確かめるのは。

もう惑わない。

足音も荒く階段を降りて、居間に出る。

好美と浩三は隣の二人の寝室で何やら話し合っている様だ。

いいじゃないか。

今しかない。

戸棚の下。二番目。

ズラリと並ぶアルバム。

一番後ろの辺りを一掴み抜き取って、パラパラ乱雑にめくる。

無い。

二冊目。

無い。

三冊目。

無い。

無い。

無い。

無い。

無い無い無い無い無い無い。

無い！！！！

記憶の霞む小学生の頃から、その下の時期の写真が一切無い。



足元に張った薄い氷が割れて、全身冷たい冷水に浸った様な。日常と言う普遍的常識が崩れて、その瓦礫に全身埋もれたかの様な。

普通の日々と言う道に大きな口が開き、奈落の底に自分を引き摺り下ろして、非日常にどっぷり漬け込んでふやかした様な。

疑念は、確信に変わった。

この家族は仮初だ。嘘と虚栄で塗り固めた嘘偽りの家族。ずっと騙されていた。

「っつ——…信じてたのに、」

正しく言えば、信じていなかった、だ。

フラフラと立ち上がって散らかしたその後を片付けする事もなく部屋に戻ろうと、ガラスの嵌った引き戸に手をかけた。

「どうするって言うの?!」

好美の甲高い悲鳴にも似た叫びが奏汰の耳を突いた。驚いて寝室を振り返る。

「かあさ……」

声を出そうとして、聞こえてきた浩三の言葉に、声は飲み込まれた。

「奏汰に聞こえたらどうする！」

ドクッと嫌な音を立てて心臓がはねた。

ハッハッと呼吸が荒くなる。僕の今いるこの家で、僕に関する事を、聞かれてはいけない事を話している。仮初の父母が。

音を立てない様に父母のいる寝室に忍び寄る。二人は僕に聞かれていないと判断したのか、話を再開した。

「あの子、もう気づいてるはずよ」

「今まで上手くやれていたんだ、大丈夫だろう？」

「でも……！ もう隠せないわ、」

何を話しているのかは容易に想像がついた。僕の先程辿り付いた真実。この会話が指し示す意味。

「私達、だって——」

やめろ、その先は聞きたくない。聞いてしまったらもう戻れない。

気のせいと断じられない。

僕が只々単に疑っていただけだって思えない！

「あの子の本当の親じゃないんだから!!」

ヒュウツと喉が嫌な音を立てて空気を飲み込んだ。心臓がドグツと蠢いた。

「だが、あの子の本当の両親は……」

もう聞かなくていいや。

僕の思っていた事は本当だった。

満足か？ 昨日の僕。

目の前の扉を大きく音を立てて開く。中の二人が大きく息を呑むのが見えた。

「か、奏汰、何処から聞いてたの？」

好美が怯えた様に聞いてきた。

口の端を歪める。何処から来たのか分からない悔しさと悲しみと、純粹な怒りが僕を支配して、この人達に執着するための想い出や、厚意や好意ももう奥底に眠ってしまっ

「母さん、言ったよね。僕達は家族だって。今聞いた通りだと、違ったんだね。嘘なんて吐かないで言ってくれたって信じてたのに」

好美が言葉を呑んだ。浩三は最早言い訳もしようとし

その対応が更に癪に障った。



「何とか言っつてよ！ 言い訳する価値も無いって言うのか?! 僕の……、俺の信じてきた物は何だったの!!」
昂る気持ちのまま、叫んだ。俺なんて初めて言った。激昂して灼熱する気持ちの行き所が無い。

「っもういいよ」

一言吐き捨てると僕は寢室を後にした。立ち去ろうとするその背中を追って浩三の声が聞こえる。

ハハッ……。何か言っつたら。

クックッと喉の奥で笑う。

追いかけて来た好美の手を振り払って言い放つ。

「嘘つき」

怯んだ好美を置いて昼下がりの町に飛び出す。まろい蜜色の光は僕を歓迎している様で、自然と笑みを浮かべる。

この光は僕を歓迎しているのか、嵌めるために嘲笑っているのか。

皮肉に嘲笑ってから僕はかけた。

何処をどう走ったのか。

気が付けば知らない道に出ていた。

知らない様な、知っている様な、でも確実に知らない道。不自然だ。

戻ろうかと辺りを見渡した時。

見覚えのある人影が自分の一つ手前の通りを通過して山の中に入って行くのが見えた。

……? 千歳? 何してるんだ?

千歳は周りを気にする事なく山の中に消えた。僕は異様とも言える今の状況で千歳を追う事を決めた。

ガサガサ草叢くさむらを掻き分けて進む。千歳は何度もこの山に来ているのか、人が一人通れる様な獣道が一本スツと伸びていた。

この山、何処か懐かしい。知ってる気がする。この樹、知ってる。そこを抜けたら、舗装された道に出る。飲める水の湧いた水飲み場があつて……。

あれ？ 何で知っているんだ？

耳朶を打つ蟬の声、チロチロと水の湧く音。噴き出す汗に、痛む頭。

始めは熱中症かと思つたが、紅い眼の鴉を見て、思つた。

ああ、コレ、また記憶を見るのか。

そして、鴉の飛び立った樹で出来た天井を振り仰ぐと、頭が、ズキンッと、鳴いた。

『ちいちゃん！』

『かつ君、ほら、こっち！』

『本当にあるの？ 彼岸花の神社なんて』

『あるよ！ 無かつたら困るもん！』

『ほら、頑張って！』

そうだ、この山。

昔、千歳と遊んでいた山だ。

その頃の僕達は二人で彼岸花の神社を探す探偵団と銘打って色々な山に遊びに行った。

この山は、一番お気に入りの山で、ひたすらに遊んでいた……。と、思う。

ゼゼエ息が切れる。重たい頭と体を引きずって僕は頂上についた。

そこに広がっていたのは、

「千歳……？ 何、その神社……」

真っ赤。燃える様な紅に、緋色の鳥居。紅い眼の鴉が自分を見下ろして。

その中心に神社の社があり、その境内に千歳が座って微笑んでいた。まるで社の神、神社の主の様に。



「ねえ、奏汰。見つかったら仕方ないし、教えてあげるよ。知りたいでしょ？ 真実。でも、」
混乱する僕を置いて千歳は幼子に語りかける様に優しく笑った。

「私を否定しないで。私を嫌わないで」
千歳がどうしてここにいるのだろうか。

僕に関わる怪奇現象はもしや千歳のせいなのか？ そんなはずは無い。僕にとって千歳が一番で、千歳も僕が一番で、そんな千歳がどうして僕を？

千歳が語り始めた。

幼い僕は彼岸花の神社を探す事にハマっていた。目的は二人共違った。

僕は両親との仲を良くする事を。千歳は僕の両親を消す事。いや、正しく言うならば僕を両親から助ける事。そんなある日、この山で僕が怪我をした。その血が地面に咲いた彼岸花に垂れた時に、この神社が現れた。

願いを言おうとして、僕はふと気が付いた。

自分達の願いが食い違っている事に。

僕は争いを起こした。

その弾みに千歳は僕を突き飛ばした。

僕は樹に強かに頭を打ち付け動かなくなったそうだ。

死んだ様に思えた僕は生きていた。気絶して、少しばかり頭を切っていただけだった。

けれども気が動転していた千歳は、神社に願った。

『奏汰を治して！ その代わりに奏汰のお父さんをあげる！ あの人を殺して！ 奏汰を助けて！』

神社は願いを聞き届けた。無慈悲に。

そして千歳は気づいてしまった。

僕が生きていた事に。

目が覚めたら僕に責められる。そう思った千歳は僕の母を犠牲に僕の記憶を消す事にした。

『奏汰のお母さんの命と引き換えに奏汰の記憶を消して』

その願いは叶えられた。

僕の両親は亡骸を残して“命”だけ対価に消え去った。千歳は残された僕が引き取られる時も、ここに来たい方向に進む様にやって来た。今までも、これからも。

頭がクラクラした。

僕の知らないところで、千歳は僕に都合のいい様にずっとやって来たのだ。誰にも言わずに、たった一人で。
「っつ——、千歳。僕のためだったんだね。ありがとう……。でも、でもね、」

千歳は表情の無い顔で僕を見下ろしていた。もうここに心は無いのかも知れなかった。

「僕は、それでも、あの人達が好きだったよ、出来るなら、辛くてもそれを抱えて生きていきたかった……」
ツウツと一筋、涙が伝った。それは千歳も同じだった。二人、声も無く泣きながら、その隙間を、夜を連れ
た夕風が通り過ぎて行った。

「安心して、奏汰。これで最後だから」

千歳は涙を拭って優しく儂く笑った。

「私と引き換えに、消えて。そして、奏汰に記憶と両親、戻してあげて」

何をするつもりなのか、もっと早く気づけたら良かった。止めれば良かった。あんな事言わなきゃ良かった。

「待って！ 待って、千歳っ！ 行かないでよ、僕を置いて行くのか?! 行くな、行くなよ！」

走って、手を、手を——……！

『』
千歳の唇が別れの形に動いた。嫌だ、と叫ぶ。もういいよ、独りじゃないのに、独りになるなよ、声は出ない。



鳥居を潜ろうとした時に、肩が押された。もう思い出せないあの日の様に。再び目を向けると神社も、千歳も、そこにはいなかった。消えていた。

「っっ!! ——…ああああああああ!!」

身を絞る様に叫んだ。泣いた。咽んだ。叫んだ。絶叫して、天も地も分からなくて、胃がひっくりかえった。神社のあった場所には一叢の彼岸花が何喰わぬ顔で咲き誇っていた。

僕が否定しなければ？

僕がここに来なければ？

後悔は尽きない。

死のうとした。

ダメだった。

無理だった。

千歳の救いたかった命を無駄に出来なかった。とか言って、怖かった。竦んで、無理だった。ダメだった。記憶も両親も戻らなかった。対価が足りなかった。千歳一人じゃ神社を消すのが精一杯だった様で、何も戻らなかった。

一人で山を下りて、家に帰った。

何も言えずにごめん、と繰り返して泣く僕に二人は優しく出迎えて、真実を教えてくれた。

僕の両親の死。何も覚えていない僕を哀れに思って、自分の子として育てた事。

僕の親は酷い扱いをしていたので、思い出させない様にしていた事。聞かれて、慌てて隠してしまった事。涙を零す両親に僕も涙を流して、やっぱり親だったんだな、僕の両親はこの人達なんだな、と泣いた。

千歳がいなくなって、町は一騒動だった。けれど、千歳の遺書が見つかって、事態は一転した。

許されない事をした。

償って来る。

そんな内容が始まって、両親の不仲等、思春期の子供が悩むアレコレが書いてあり、最後はこう締めくくられていた。

『私が帰って来ずになくなったら償いが成功して、私が死んだと言う事です。残していく人には申し訳ないと思っています。許して欲しい。奏汰。大好きだよ。』

なんて馬鹿なんだ。遺書があるって事は、お前もここに残りたかったんだらう？

何で行っちゃうかな……。

両親の事も何とかなったはずだよ。

僕の事も、何とかなったはずだ。

馬鹿、馬鹿だな、

お前がここにいちゃダメな理由にはならないよ。好きだよ、好きだ、好きだ、千歳。

苦しい事も、明けない夜も、

死にたい時も、うれしい時も、

凌辱されても、不安でも、

千歳がいるそれだけで、

光に出来た。導に出来た。

星の無い夜。月の無い夜。



太陽の無い朝。ライトの無いトンネル。
真っ暗だよ、真っ暗だけど進むよ。
全うして千歳に会えるその時まで、

僕は、今を生きるよ。